

Title	アレクセイ・トルストイにおけるダブル・セルフの問題
Author(s)	横田, 真紀
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49202
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	横 田 真 紀
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 2 2 3 0 2 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	アレクセイ・トルストイにおけるダブル・セルフの問題
論文審査委員	(主査) 教授 尾上新太郎 (副査) 教授 生田美智子 教授 堀江 新二 教授 奥西 峻介 教授 嶋本 隆光

論 文 内 容 の 要 旨

アレクセイ・トルストイが博士論文のテーマに決まって以後、私は長い間、この感じの悪い主人公から逃げ続けてきた。それはこの人物を研究する過程で、私がこれまでに予想もしなかったような大きな困難に突き当たらなければならなかったためである。

何よりも、短期間で仕上げねばならない論文の主役にこれほどに理解しがたい人物を据えるのは、あまりにも大きな冒険のように思われた。アレクセイ・トルストイという人物は、その性格の極端さや、人生における思想的・政治的立場の変化の多さのために、折り目正しい几帳面さを好む日本人の標準的なものの考え方からは、あまりにも遠くかけ離れて見えるだけではない。彼は当時を生きるロシア人の目にも、しばしばまことに理解しがたい人物に映った。そのことは、ナデージダ・マンデリシタームの回想録の冒頭の一文を取っても裏づけられよう。

何よりも、アレクセイ・トルストイの人物像の異色さを象徴しているのは彼の文学的経歴である。

アレクセイ・トルストイは 1882 年にサマーラのトルストイ伯爵家の末子に生まれた。だが、家庭の事情から、彼は幼少期を上流社会の生活とは無縁の田舎で過ごし、貴族としての教育を受けることはなかった。それどころか、社会主義思想の持ち主であった義父と母親により、彼は貴族階級に対する敵対心を植えつけられて育つ。このような事情により、アレクセイ・トルストイにははっきりした身分的なアイデンティティが形成されなかなただけでなく、彼の貴族的出自には後に多くの同時代人から疑問が投げかけられることになった。アレクセイ・トルストイは自らの貴族性や身分をどのように捉えていたのか。それはこの作家の人格形成やアイデンティティの形成の根幹に関わる重大な問題であるため、本稿ではこの問題に関しても多くの紙面を割いて考察を行った。

さて、アレクセイ・トルストイは貴族生活をほとんど身近に経験しなかったにも関わらず、「銀の時代」と呼ばれる、芸術文化の様々な潮流が百花繚乱のように咲き乱れた 20 世紀初頭のロシアで、19 世紀ロシア文学の伝統を継承する貴族作家として文壇にデビューし、貴族生活の退廃をつぶさに作品の中で描いた。彼は持ち前の自己演出の才覚により、生粋の貴族以上に貴族的に振る舞う術を身に着けていたが、他方では、幼少期から教え込まれた社会主義への共感心は心の中から消えなかった。

二月革命をアレクセイ・トルストイは民衆の偉大な反乱の力として歓喜して迎える。それは彼には母や養父の理念の勝利のように思われた。だが、十月革命が起き、そして国内戦が始まると、トルストイは多くのロシア知識人同様

に、流血の惨事を嫌って、ポリシェヴィキ政権を避けて国外亡命し、反革命的出版に協力した。だが、それからわずか四年の後、ソヴィエトでネップ政策が始まると、彼は望郷の念と亡命生活への疲労から、過去の主張を翻し、今度はソヴィエト政権を承認すると述べて、祖国に舞い戻った。

ソヴィエト体制下でアレクセイ・トルストイは以前のような貴族作家としてではなく、プロレタリアを代表する作家として文筆の才を発揮し、社会主義リアリズム路線を継承して革命を賛美する作品を熱心を書くことにより、やがてスターリン体制下で最も有名なソヴィエト作家の一人となった。その際、トルストイはスターリン体制による事実の歪曲の要求（「スターリン神話」の捏造の要求）にも応えて、古今を問わず、歴史事件を歪曲する多くの作品を書いた。このような熱心な権力への奉仕が全体として彼の功績として認められ、アレクセイ・トルストイは「国民の指導者」の引き立てを得て、物質的に不自由のない生活を送り、彼の同時代人の多くがそれによって命を落とした粛清を免れることができただけでなく、スターリン賞を受賞し、晩年（1937年）にはソヴィエト最高会議議員、1939年には科学アカデミー正会員に選出されるなど、政治的要職にまで登用された。だが、その一方で、国外では反体制的な言動を弄するなどして、矛盾した本心をのぞかせていた。

アレクセイ・トルストイがスターリン体制下で粛清の対象とならなかったことは、それだけで、稀な幸運であると言えた。だが、この全体主義的な体制下で、彼が送った生活は驚くべきものであった。惚れっぽく、飽きやすく、大食漢で、贅沢好きで、外見や持ち物に趣向を凝らし、多くの賛辞や勲章に包まれたアレクセイ・トルストイの晩年の生活は、まさにソヴィエトの「貴族」としてのノーメンクラトゥーラの悠々自適の生活であった。彼は政治的迫害によってではなく、病によって死を遂げた。アレクセイ・トルストイは人生において次々と立場を変えることで、離れ業を達成したように見える。彼にはあたかもスターリン体制の恐怖や苦痛さえも無縁であるかのようなようだった。生涯に4人も妻を変え、その他にも数人の女性に恋をし、最後の結婚においては20年以上連れ添った妻と二人の息子と捨ててまで、別の女性を選んだ。

ソヴィエト国内での公式的な評判はともかくとして、このような人生を送ったアレクセイ・トルストイを、カメレオンのような変節ぶりによって、時代を抜け目なく、あざとく生き抜いた悪役として批判する同時代人がいなかったわけではない。最高会議議員となったアレクセイ・トルストイのもとに市井の人々から批判や幻滅の手紙が送られていたことは今日明らかとなっている。だが、直接彼を知っていた人々の回想の中には、イヴァン・ブーニンのように、アレクセイ・トルストイの二枚舌やあからさまな変節ぶりに呆れながらも、どこかしら憎めない調子で彼の人物像を描写するものもある。

これまで、ソヴィエト体制下の時代を含め、多くの研究者たちが、アレクセイ・トルストイの作品だけでなく、彼の人格や生き様そのものに熱心な興味を抱いて来た。本稿を進める上で、筆者は、ソヴィエト体制下の研究者たちが様々な描写の規制を受けながらも、この作家の研究にどれほど熱意を燃やし、根気強く、不撓不屈の意志によって、事実を探し求めてきたかに驚きを禁じえなかった。特に、ユーリイ・オクリャンスキー、ヴィクトル・ペチェーリンの両氏においては、アレクセイ・トルストイは間違いなく彼らのライフワークであった。オクリャンスキーは帝政時代の資料を丹念に調べ上げてアレクセイ・トルストイの幼少期を明らかにし、トルストイばかりでなくその両親や親族の人生の軌跡をも追った。ペチェーリンは初めてアレクセイ・トルストイの伝記を発行した1978年から、20年以上にも渡って研究を続け、2001年に過去の体制下では発表を許されなかった事実を補って、900ページ以上もある大容量の伝記を再び刊行した。両氏の研究には本稿も随分多くのおかげをこうむっているが、これらの人々の熱意はまさに研究者魂と言う他はない。

他にもアレクセイ・トルストイに関する研究書はいくつか存在するが、一様に、専門家はトルストイの作品のみならず、彼の個性や、人生にも大きな関心を注いでいる。なぜそれほどアレクセイ・トルストイの人物像は彼らの興味を引きつけたのであろうか？なぜ理解しがたい、多くの矛盾した言動の数々にも関わらず、そしてスターリン体制への政治的迎合という事実にも関わらず、この作家は今日でもこれほどまでも専門家の注意を引き続けているのだろうか？

その理由、つまりアレクセイ・トルストイの人格的な深層を究明することこそが、本稿の主要な課題であり、筆者が最も苦勞させられた部分であった。人間の精神的な暗闇を克明に描写し、厳しいまでに追及したドストエフスキーの小説をアレクセイ・トルストイが敬遠していたことは知られているが、そのような態度にも表れているように、ト

ルストイは自分自身の内的世界を含めて、人間の精神的な暗闇の部分には決して深入りしようとしなかった。作品においても、彼は人間の負の感情や反応に関しては表面的な描写にとどまった。だが、アレクセイ・トルストイの一見、陽気で、健康で、生命力に溢れた、破綻のない生涯にも関わらず、多くの専門家や同時代人が、彼の「精神病理的側面」を指摘していることは意義深いことである。イヴァン・ブーニン¹は早くからアレクセイ・トルストイの二重人格的特徴を指摘していたし、A.M. クリュコヴァもまたこの作家の人格の二重性に言及しつつ、アレクセイ・トルストイに関する偏りのない研究を行うためには、彼の作品に注目するばかりでなく、彼の人格的な特徴をも考慮に入れることが必要不可欠であると結論づけている¹。アレクセイ・トルストイの無自覚の、むしろ彼が自覚することを避け続けた深刻な精神病理的問題を無視しては、クリューコヴァが述べている通り、彼に関する研究は中核を失ってしまうのである。

だが、研究者によって以上のような指摘がなされながらも、この問題の原因や発生のプロセスが深く追求されることはこれまでほとんどなかった。ソヴィエト体制が崩壊した後になっても、作家としてのアレクセイ・トルストイの権威や、親族に対する配慮などが、このネガティブな問題を深く追求することを妨げているものと思われる。ペチェーリンの詳細な伝記も、この問題の重要性をほとんど見過ごしてしまっている点では頼りにはできない。ただし、2006年に出版されたアレクセイ・ヴァルラーモフの研究書が、これまでになかった形でこの問題に言及していることは注目に値する。ヴァルラーモフはアレクセイ・トルストイの自己分裂的な症状の原因を、作家の幼少期における体験と結びつけて究明しようと試みている最初の伝記作家である。

筆者もまた、本稿において、アレクセイ・トルストイの自己分裂的な症状の実態とその原因を解明することに多くの労力を費やした。そして、ヴァルラーモフと同様に、その根本的な原因を彼の幼少期に求めている。本稿では、主として、アレクセイ・トルストイの幼少期および青年期に限定して、彼の人生と作品を扱っている。それは、生涯、次々と政治的、思想的立場を変えていったように見えるアレクセイ・トルストイの中にどのような心理があったのか、なぜ彼はこのような矛盾する言動を行うことができたのか、そのことを解明するためには、まずこの作家の人格形成における最も重要な時期、すなわち幼少期から青年期にかけての時期に注目することがぜひとも不可欠であると判断されたためである。そして、「ダブル・セルフ」という精神医学的概念を導入することにより、この問題に、これまでの研究とは少し違った形で光を当てることができたのではないかと考えている。

本稿で行った考察は、今後、亡命以後、そしてスターリン体制下でのアレクセイ・トルストイの立場を分析していく上でも、欠かせない基盤となるはずである。なぜなら、アレクセイ・トルストイの社会主義に対する立場がいかなるものであるか、彼の革命賛美にどのような意味がこめられているか、それは本稿で分析したように、彼の幼少期、特に、彼が幼少期に受けた思想教育という観点抜きにしては決して扱うことができない問題だからである。このことはアレクセイ・トルストイのソヴィエト帰国や、スターリン体制への奉仕など彼の人生における幾多の立場の変化の根本的な動機とも切り離せない関わりがある。I. ブーニンは、アレクセイ・トルストイのソヴィエト政権支持を決して真摯なものだとは捉えず、それは彼の愛国心と物欲の成せる業であったように描写している。ブーニンは同時代人としてまた作家としてアレクセイ・トルストイの人格に関して鋭い観察を行っている一人であるが、ただし、彼がアレクセイ・トルストイにはいかなる思想的統一性もなかったと考えていることには、必ずしも同意できない部分が残る。その理由は、本稿で述べたように、アレクセイ・トルストイにあった一種の精神病理的な人格分裂の症状の一環として、彼は心の一方では、幼少期から母と義父によって教え込まれた社会主義という理想、ロシアの未来に出現するであろう理想郷を、生涯に渡って、永久不滅の理想として信じ続けていたからである。他方では、彼はそれとは相矛盾する考えをも持っていたのだが、そのような自己分裂的な状態をアレクセイ・トルストイは自ら意識することはなく、解消もできないまま生涯を終えた。アレクセイ・トルストイが死の直前まで、スターリン体制や第二次世界大戦における多くの惨事を目撃しながらも、依然としてロシアの未来に希望を見出すことをやめなかったのも、このような症状に基づいてのことであると考えられる。

¹ A.H. Толстой и русская литература. С.10-12.

さらに、アレクセイ・トルストイの場合、彼の思想的・哲学的立場を論じるためには、文学作品を取り上げるだけでは不十分であることをA.M. クリュコヴァは指摘する、「トルストイは決して哲学的な論文や記事を書かなかった、そこで彼の哲学的・美学的見解の形成に関しては、我々は彼の日記や手紙に含まれる断片的な発言から判断するしかない。」 Там же.С.26.

さて、自らの精神病理的側面に決して目を向けることなく、その存在を認めることもなかったアレクセイ・トルストイだが、晩年、不幸な巡り合わせによって、彼はそれまで直視することを拒み続けて来た「ドストエフスキ的世界」と、耐え難いほどの規模で対峙するように迫られた。1942年にナチス・ドイツの行った悪行調査委員会に加えられて以来、悪名高いカティンの森に派遣されたことが、彼の病死の時期を早める原因になったと推測する専門家も存在する。

なお、本稿では、アレクセイ・トルストイにまつわる歴史的事実に関しては、全てソヴィエト体制下で刊行された伝記資料を始めとする既存の研究書に依拠しているため、ここでは未発表の新事実は提示されていない。ただし、本稿において筆者が多大な注意を払ったのは、ソヴィエト体制下で出版された研究書にはつきものであったイデオロギー的先入観を極力、排除して、これまでにない公平で客観的な作家像をうちたてることである。アレクセイ・トルストイに関する重要な学術資料の多くは、ソヴィエト体制下で刊行されたものであるが、それらの出版物はソヴィエト体制の政治的事情に鑑みて、ジャンルを問わず、ほぼ例外なく、事実の隠蔽や、解釈の歪曲を免れられていない。それらの資料においてはまず何よりもアレクセイ・トルストイ自身の意向が極めて尊重され、次に、トルストイの死後は、遺族（特に彼の最後の妻）が彼に関する研究書の出版に大きな権限を持ち、さらに、その上に、それぞれの研究書の執筆者の解釈や判断がつけ加えられた。従って、ソヴィエト時代に発行された研究書はあたかも何重もの先入観を経由しているも同然であった。だが、それでも、これらが今日においてもアレクセイ・トルストイ研究に欠かせない最重要の資料であることは否定できない。そこで、筆者は本稿を執筆するにあたって、それらの研究書から知りえた事実を一つ一つ解釈しなおすを試みた。つまり、それぞれの歴史的事実の有無に関しては、それらの資料に依拠しながらも、その事実の解釈につけ加えられた執筆者の見解、アレクセイ・トルストイ自身の見解、イデオロギー的先入観に基づいた評価などを一旦、区別した上で、誇張や先入観と思われるものを排除し、もう一度、事実の解釈や評価が公平なものになるように考え直した。この作業なしには、長年に渡るソヴィエト体制の支配のもとで、分厚い地層のように積み重なった先入観を排除して、客観的に考察を進めることはできなかった。

最後に、本稿において筆者がアレクセイ・トルストイの作品ではなく彼の人生に重点を置いて分析を行っていることに対して、ある程度、批判の声が上がるのが予想されるので、それに前もって答えておきたい。筆者はこれまでに投稿論文などを通して、日本のロシア文学研究者からいくつかのかなり厳しい批判をいただいた。中には、この作家の人生そのものに注目すること自体を単なるスキャンダルリズムと決めつけて退けたり、（ソヴィエト体制が崩壊してしまった今日、）「今更、駄作を研究して何になるのか」と指摘したりする声もあった。ある同僚は「アレクセイ・トルストイの何が旬なの？」という独特の表現によって、この作家を今日研究すること自体に果たして意味があるのかどうかという疑問を筆者に投げかけた。このようなコメントの背後には、日本のこれまでのロシア文学研究において醸造されて来た独特の雰囲気を感じられるように思う。

日本では、主として冷戦時代や高度経済成長期に、世間における政治的な関心の高まりを受けて、ロシア文学研究界においても、ソヴィエト公式作家の研究が盛んになった。その際、アレクセイ・トルストイについても、ソヴィエト公式作家の一人として、翻訳が出版され、世間の注目を集めた。だが、ロシア本国でペレストロイカ、グラスノスチ、ソヴィエト体制崩壊が起こり、ソヴィエト体制の暗部が世界に向けて明らかにされるにつれて、ソヴィエト作家に対する日本の世間の関心は急速に冷えていき、現在ではほぼ立ち消えの状態となった。だが、そのような事情には、世間の興味の移り変わりのみならず、過去にソヴィエト本国からイデオロギー的に偏った誤りの多い文学批評を直輸入しておきながら、それを未だ真剣に修正しようとしていない研究者も大きな責任を負っていると考えられる。

日本のロシア文学研究者の義務は、そもそも、ロシア本国における政治宣伝や流行の受け売りに終わらず、客観的な事実を独自の視点から探求し、それを日本の世間に伝えることであった。だが、ソヴィエト時代には、概して、数多くの研究者が、ソヴィエト本国が提唱する政治的・イデオロギー的に偏った公式路線に大きく、影響を受けた状態でソヴィエト文学全体をとらえて来てしまったこと、そして現在も、それらの過去については適切な見直し作業があまり進んでいるといえない状態が、体制崩壊後に、これらの作品が日本の世間からほとんど忘れ去られてしまう原因を作ったと言えるのではないだろうか。

作家の人物像や人生全体に対する深い理解がないままに、政治情勢に迎合的な態度で、個別の文学作品を解釈することは危険であると筆者は考えている。文学作品の価値の中核を成すのは、国家が提唱する政治的イデオロギーや、

世間が形成する流行ではなく、作家本人の内的世界であるはずである。(皮肉なことに、アレクセイ・トルストイのいくつかの作品は、政治的迎合のために価値がすっかり歪められてしまっているが、そのような作品を論じる場合にも、研究者までが著者と一体となって政治的観点からのみ作品を判断しようとするのではなく、それを著者の内的変化の過程と結びつけてとらえることがぜひとも不可欠であろう。)

I. ブーニン はアレクセイ・トルストイを「大いなる才能」と「不道德」の結合であると呼んだ。資本主義国となったロシアの世間においては、今や激しい文学的競争と淘汰が行われているにも関わらず、ソヴィエト公式作家が未だ世間の関心を失っていないことは、これらの作家の作品の価値が読者にとっては決して無に帰していないことを何より物語っている。特に、ペレストロイカ以後は、ソヴィエト体制による政治的迫害と果敢に闘った作家たちが世界中で注目を集めるようになったが、それと同時に、彼らとは反対の生き方を選んだソヴィエト公式作家たちの人生をも、もう一度見直そうという動きが起こっていることは興味深い。それは、もはや過去のように政治的先入観にとらわれることなく、この両方の陣営にいた人々について知ることができるようになった現在、作品に表れる表面的な政治的主張にとらわれず、作品を通して垣間見える著者の内的な世界、善と悪、光と闇、正と負、聖と俗の両面を合わせ持った有機的存在としての人間の重さを、余すところなく感じ取りたいという読者の心の欲求から起こっていることではないだろうか。作家の人物伝を書くという作業は、作家の文学作品を分析するだけでは終わらず、作家の人格や人生に対する深い理解と解釈を読者に提供するところに意義がある。日本のロシア文学研究者には、今、ソヴィエト公式作家やロシア作家にもう一度光を当てて、これまで語られてこなかった彼らの人生と作品を一つのまとまりを持つ全体として、とらえ直す作業が期待されているものと思う。

論文審査の結果の要旨

アレクセイ・トルストイ (Aleksei N. Tolstói, 1882 年—1945 年) の思想的立場、政治的立場は、けだし、一貫したものとはされない。そういう印象を、後世の人々に与える。同時代の人々にも、そのような印象を与えた。

彼は、貴族の出身—実父は伯爵—で、青年期、過剰なまでに貴族的に振る舞ったこともあった。(但し、幼少期、貴族らしい育ち方はしていない)。20 世紀初頭、貴族作家として文壇にデビューした。しかし、スターリン体制下では、その独裁体制に迎合して生きたのだった。過剰に革命を賛美し、「スターリン神話」の捏造に加担した。要するに、権力に媚び、上手に生きたのである。それで、同体制下、大いに出世したのでもあった。プロレタリア作家としての名声を博し、スターリン体制下における代表的な作家となった。だが、しかし、国外では、同時に反体制的な言動をとったのでもある。だから、同時代の人々も、アレクセイ・トルストイのことを不可解な人物と見たのだった。そういう意味では、アレクセイ・トルストイは二重人格者、と映るのも、尤もなことである。

本論は、そういうアレクセイ・トルストイの幼少期に視点を当て、二重人格者と言われることの根源について、考察したものである。

独裁体制下の人々は、多かれ少なかれ、二重人格者として生きざるを得ない。アレクセイ・トルストイも、そういう政治的な理由から、二重人格者としての相貌を呈する、と、見易くは、なる。

だが、しかし、論者は、その根源を幼少期の育ち方に見ているのである。論者は、義父と母親に詳細に言及し、彼らがどういう思想の持ち主だったか、アレクセイ・トルストイがそれをどう受け入れたか、といったことを、つぶさに考察している。

幼少期、アレクセイ・トルストイは、社会主義思想を、義父と母から強く教え込まれたのである。それで、生涯、彼は社会主義思想を持ち続けた。一応、そう言える。だが、厳密に言うなら、事はそんなに単純でない。

アレクセイ・トルストイは、ドストエフスキーを敬遠していた。とは、彼が、意識して、人間の精神的闇の部分には、深入りしなかったことを意味する、と思われる。だが、彼には、多くの先学が指摘している通り、「精神病的側面」があったのである。この点を蔑ろにして、アレクセイ・トルストイの全的な研究は覚束ない。論者は、この点、よく弁えている。こういうアレクセイ・トルストイに関する「精神病的側面」の研究が、彼の全的理解のためには必要不可欠という指摘は、過去に複数あり、珍しいとは言えないのだが、論者のように、本格的にその方面からの研

究を、実地に行った例はほとんどない。

19世紀、20世紀のロシアにおいては、矛盾のない人間こそが、時代の要請だった。合理的に人間を理解することが、その時代の人間観の基本だった。アレクセイ・トルストイは、その時期のロシア人だが、そういう見方では、彼を理解することができない。そういうことでは、一体、人間というものが理解できないのである。直前のことを、論者は、アレクセイ・トルストイに即して論述しているとも言える。

本論は、アレクセイ・トルストイの作者論的研究という範疇に入るものだが、同研究は、ソヴィエト時代に出版された、イデオロギーまみれの、政治的に捏造された資料を用いざるを得ない。彼の伝記等に関する資料は、同時代に刊行されたものが、ほとんどなのである。そういう資料の解説は、事実の発掘の点で、困難な手続きを必要とする。

論者は、そういう作業を、労苦を厭わず、詳細に行っている。この点も、評価に価する。ただし、引用の、その仕方、量—これらにもう少し工夫があってもよかったのではないか、という意見も出された。また、ロシア語の翻訳の点で、もう少し慎重であってもよかったのではないか、という意見も出された。だが、総じては、その問題意識、行われている考察の緻密さ—これらからして、最終試験共々、博士論文としても合格と、審査委員全員の一致した意見として、判断した。